



大粒でブランド力のあるいちごを

いちご王国とちぎ。長年日本一の座を守ってきた大黒柱は「とちおとめ」だった。だが、東京で大粒な新品種「あまおう」（福岡県）、「さがほのか」（佐賀県）など九州勢の激しい攻勢を受け、予断を許さぬ戦国時代に突入した。

何としても王座を守り抜かねばならない。「大粒でブランド力を打ち出せる際立った特徴のあるいちごが必要だ」。新たな目標を掲げたいちご新品種開発の挑戦が始まった。

スカイベリー誕生秘話（1）

砂漠に落ちた針を探す

新品種の生まれる確率は十万分の一。毎年交配実生を一万個体栽培しても十年以上を要する。実生苗をいくつ作れるかが早期品種開発のポイント。年に一万個体以上を栽培できる施設が必要だった。

平成十七年、県農業試験場いちご研究所に新しい育種用の温室が建てられた。それまで使っていた温室と合わせると二倍以上の面積となり、これまでよりかなり多くの株を植え付けて選抜できることになった。

いちごの育種は砂漠に落ちた針を探すようなものである。だが、その砂漠が小さすぎるとは勝負にもならない。事前の調査で、同じいちご生産県である福岡県では、栃木県よりも大きい規模で育種をやっているという情報はつかんでいた。これですべてと同じ土俵に上がれることになった。



選抜した実生数、10万株超す



平成17年に新設された育種用の温室

「新品種開発に大きく前進できる。研究スタッフは燃えた。」

さっそく、いちご研究グループのリーダー稲葉幸雄研究室長（現農業大学校教授）と育種を担当していた家中達広主任研究員（現農政部経営技術課副主幹）を中心に、グループ内で今後の育種と新品種開発の方針

について話し合った。さまざまな意見の中から、有望種系統の特性をピックアップして開発の方向性を絞り上げていった。具体的に動き出すタイムリミットが迫ってきていた。

大粒の新品種で勝負だ

「とちおとめ」が世に出て、十年が経過していた。福岡県に対抗して期待の星として誕生した「とちおとめ」は、いちご研究所が昭和六十年（一九八五）に開発した「女峰」と同様に、日本を代表する品種となり、主産県のシェアの三〇割を占めるまでになっていた。

栃木県は、平成元年（一九八九）に、十七年間維持してきた「いちご販売額日本一の座」を福岡県に明け渡した。その時、救世主として誕生、見事に王座を奪



スター」を選抜するには最低でも五〜六年の年月がかかる。「女峰」



は数次の厳密な選抜をクリアして生き残った種の最終交配から五年、「とよのか」(独立行政法人農業・食品産業技術総合研究機構)は十年か

た。時間はあまり残されていないかった。

その頃、主要ないちご生産県の福岡県は「あまおう」、佐賀県は「さがほのか」、静岡県は「紅ほっぺ」といった「とちおとめ」より大粒な新品種を次々に育成していた。

「味の良さでは絶対に負けないはずなのに、東京のデパートやスーパーではこれらのいちごの方が「とちおとめ」より高い値段で売られていた。研究スタッフは口惜しかった。

この苦境を跳ね返す新品種を開発しなくてはならない。いちご研究グループの話し合いの中で導き出された方向性は①「とちおとめ」より大粒で見栄えがする品種②生産者にとってもらえる収量性が高いもの③「とちおとめ」より病気に強いことが絶対条件だった。「これをクリアできる新品種が誕生すれば、生産者と消費者ニーズに合致してメリットがあり、必ず受け入れられる」。稲葉は、この三点を重点目標として育種を進めるよう家中に指示した。

ここから、栃木県産いちごの命運をかけた新品種開発への挑戦が始まった。

限られた期間の中で

家中は研究所が所有している数百種にも及ぶ品種とこれまで研究所で

回したのが「とちおとめ」だった。

しかし、長年いちご王国を支えてきた「とちおとめ」も、育成者の権利が切れるまで数年を残すだけとなっていた。天に輝く星のように、気の遠くなるような無数の種の中から交配して育成、一つの品種「ビッグ



育成・保存してきた系統の中から使

えそうな素材のリストアップを始め
た。「とちおとめ」より大粒なもの、
収量性が優れるもの、食味がいいも
の、病気に強いもの…、それぞれ優
れた特性をもった素材を選びすべ
た。

これらをうまく組合せ、優れた部
分の全てを兼ねそろえた品種を作る
ことが至上命題だった。それも短期
間のうちである。無謀とも思える

挑戦であった。

「どの種とどれを交配すれば良い
のだろうか」。悩みながらいろいろ
組み合わせを考えた。「あまり時間
がない。だが、限られた期間の中で
何としても新品種を生み出さなけれ
ばならない」。覚悟はできていた。

研究スタッフと力を合わせ、目標の
特性を備えていると考えられた系統
の交配に懸命になって取り組んだ。
この中からいくつかの有望種が最終

段階まで残り、詳細に試
験された。

数々の試練を 乗り越えて

まず交配したのは、研
究所で育成された大粒で
病気に強い特徴をもつ系
統の「00-25-1」と
「とちおとめ」だった。
この系統の中には「とち
おとめ」よりも大粒なも
のが多く、その一つに
「栃木23号」の名をつけ
て選抜を重ねた。大粒で
果実の揃いが良く、食味
も「とちおとめ」並みに



良く、硬くて傷みづら
い。収量性もあり食味
も良かった。かなり手
応えを感じる系統であ
ったが、やはり病気に
弱く、寒い時期になる
と果実の色が淡くなる
ことから、あと一歩及
ばなかった。

新品種開発へ試練の
日々が続いたが、研究
スタッフは諦めず、
黙々と交配・選抜を繰
り返していった。

外観に優れた 二つの株

美味しかった。しかし、やや卵型の
果実であまり見栄えが冴えず、「と
ちおとめ」と同様に病気に対して弱
かった。
次に「とちおとめ」と早生で多収
の「00-11-1」を交配した。交配
したものの中には「とちおとめ」よ
りも大粒で果実が硬いものが多かっ
た。有望種の可能性を秘めていたの
で、一つを選び「栃木26号」の名を
つけて選抜を重ねた。大粒で果形も

平成十八年、「とちおとめ」を生
み出した時のメンバーの一人であつ
た植木正明特別研究員（現安足農業
振興事務所部長補佐）が、研究チー
ムのリーダー・いちご研究室長とし
て古巣に戻ってきた。植木は「とち
おとめ」誕生に関わった当時の熱い
思いを胸に秘めて研究に打ち込んで
いった

この時点で「とちおとめ」を育成
した後、歴代の育種担当者が試した



想いを語る重野貴一敬称略

交配組合せは約九百、選抜した実生の数も十万余を超えていた。

研究スタッフの地道な育種の日々は続いた。家中が数多くの種から選びリストアップした交配親の系統の中に「00—24—1」という系統があった。非常に大粒で果形が良く光沢があり果実外観に優れる系統だった。だが、収量性が「とちおとめ」並みで食味が劣ったため、三年目の選抜で除外された。家中にとって気になる系統だったが、他にも優れた特徴を持つ交配親の系統があった関

係で、一年目は数組合せだけ交配して様子を見ることにした。

一年目の選抜では、研究所に新たに配属となった直井昌彦技師（現農政庁生産振興課主任）が担当することになった。経験の浅い直井は連日温室に足を運び、多い日には一日に千個近い果実をテイステイングする日々が続いた。「00—24—1」を使った組合せの中に食味が良く病気に強い「栃木20号」との組合せがあり、直井は果実が大きく外観に優れた二つの株（系統）を残すことにした。



平成十九年三月、育種を中心だった家中が異動により研究所を離れることになった。夢は後輩研究員に引き継がれることになった。

ようやく一筋の光明

平成二十年一月、果実が色づき二年目の選抜が開始された。育種用の温室の中でひととき目立つ株があった。温室の柱の陰になり、

条件が悪い場所に植えられていたにもかかわらず、それまであまり見たこともない程の大きな果実を実らせていた。前年、直井が残した二株の中の一つであった。この株に、家中の後任として赴任してきた重野貴主任研究員は魅せられた。

「これはいけるかもしれない」。重野は迷わず選ぼうと考えた。既に付けられていた系統名を見ると「06—36—1」の名称があった。

「とちおとめ」の育成から十一年が経過し、ようやく期待の新品種誕

生に一筋の光明が差し込んだ瞬間であった。

重野はこの時の想いを次のように振り返る。

その日、いつものように温室に入りました。二年目の選抜なので、同じものが四株ずつ三百種類・千二百株ありました。それを一つ一つ観察し、テイストしていききましたが、良い感じのものはありませんでした。「これもダメか」諦めかけた時、柱の陰からぱっと目に入ってきた株がありました。それは果実が大きく、色艶があつて果形も良い、姿が全体にすっきりしていました。食味を確かめたら甘みが少なく、味は薄い印象でした。しかし、ジューシーさがありました。

運悪く温室の柱の陰になっていたのも、その辺はしょうがないかな、と思いました。草姿が良く、果実の大きさと外観が申し分なかったのも、残そうと決めました。次の年、三年目の選抜で日照の十分な場所で育ててやれば、きっとそれなりになると期待しました。

（文中職名略・以下次号）